

実証主義の外には-----

山 辺 知 紀

今私が一番頭を悩ましている問題は、どうも余り経済学的問題ではないように思う。人間とか社会とかというのは一体何なのか、そんなことを梅雨空の下でジトジトと考えている。こんなことは当り前のことだろうが、今の私について見てみても、今の私の肉体は生れた時の肉体ではないし、今の私の考えも昔のそれとは全然違う。でもそれでも、私は私でありつづけている。この場合の私というのはどう考えたらいいのか。少なくとも昔から今まで、私の頭は私の肩の上にあるし、顔立ちはずい分変わってきたにしても、目と鼻の位置が入れ換るなどということは、幸いにして起っていない。私の臓器の位置も、大枠では大体それなりの位置関係を維持している。(勿論、他人の臓器を移植するなどという大それたことなどしていない。)その上、それぞれの臓器や器官も、これは余り自信はないが、それぞれに与えられた機能を、今も昔と同様にやっているように思う。もっとも最近、頭や心臓で物を考えたり感じたりするより、胃袋でばかり考えているような気はするが…

このように考えてくると、昔から今まで変わらずに続いているのは、臓器や器官そのものではなく、唯それらの臓器や器官の機能とか構造ということになってしまう。私が生きていく上では、常に酸素を吸って炭酸ガスを排出しなければならぬし、毎日何がしかの食物を摂取しなければならぬ。そうした機能は、生れた時から今までズーッと続いてきている。そしてそれらの機能を果す種々の器官の構造として私という肉体は存在している。

もしも私が成長の途中で視力を失っていたなら、私の指先が私の眼の機能の何分の一かの機能を果してくれていたかも知れない。足を手のように使って立派に生きている手の不自由な人の話もある。

人間として存るということは、そこにどうしても不可欠な働らきが前提されている。そしてその働らきに応じて種々の臓器や器官の構造が決められていく。だから私というのは、おそらくそうした機能・構造からなる一つの秩序なのだろう。

この秩序という言葉はたしかに便利な言葉だと思う。その時その時をとってみれば多少の変化があろうとも、この秩序という枠さえ継続しているなら、私は私でいられる。たとえ脚がなくなっても、眼や耳がなくなっても、悩むことは続くとしても、私は私であるし、少なくとも人間でいられる。器官や臓器の構造から出発するのではなく、まず人間としての機能から出発すると、色々と考えていく上では便利だと思う。そこに成立する秩序を固定的に考えなくて済むし、秩序という言葉の捉える範囲も広げられる。でもやはり、それだけで自分というものを考えるには物足りない。DNAなどという言葉はもっと味気がない。心とか精神といったものはどうなってるのだろう。でも心や精神を見たり触れたりした人は誰も居ない。心や精神については、ただその現われ——精神現象——を知ることが出来るだけである。そして広い意味では、こうした精神現象も上の秩序の中に取り込ま
(前頁下段につづく)

せて議会の役割強化、結社の自由、情報公開、党内異論派の保護など政治改革を要求する文書を発表し物議をかもし出した。さらに、9月国会開催時には、同じくエコノミスト16名が社会学者、歴史家、作家、音楽家、映画監督など総計100名の支持を取りつけ、上と同主旨の公開書簡を国会議員に送りつけている。

ラディカル派エコノミストばかりではない。ペレストロイカの追い風の中、こうした動きは党内中枢部にまで及んできているというのが昨年滞在の折の筆者の実感であった。たとえば、「愛国戦線」議長をつとめるポジガイは事あるごとに政治構造の多元化を主張しブダペスト知識人の間で最大の人気を博していた。また、従来の反体制異論派と体制内改革派の境界がぼけ両者が融合しつつあるのも最近の特徴である。反体制異論派メンバーをも含み昨年9月結成された「民主フォーラム」はハンガリー最大の草の根民主団体であるが、党内の有力な知識人もこれに参加している。「フォーラム」で公然と党を批判した著名なエコノミスト、ラースロー・レンジェル他3名の知識人は今年4月党を除名されたが、ポジガイ、ニュルシュなど指導的改革派メンバーはこうした党内異論派メンバーに理解を示す態度を取っている。

政治改革をめぐる党中枢部における攻防は、

(次頁より続く)

れている。秩序というのは、きっとそんなものなのだろう。

私という存在は、かくして秩序として捉えられたことになる。しかし厳密に言えば、現わされた私が一つの秩序だということであって、私が秩序だということでもあるまい。「メンデルスゾーンの音楽の特徴をのべたいのなら、こう言えばよいのではないだろうか。

それから一カ月後の5月22日の党全国協議会において、56年動乱以後31年にわたってこの国を統治してきたカーダール退陣（書記長職解任、政治局も去る）、ニュルシュ、ポジガイなど改革派の台頭（政治局入り）でひとまずの決着を見た。新書記長で首相も兼務するグロスは経済改革派だが、政治改革には慎重であり、筆者は滞在中いまま一つ大衆の人気に欠ける政治家との印象を持っていたが、今年に入りポジガイなど党内改革派有力メンバーとの連携を強め、トップ・リーダーの座を射止めたようだ。『ワシントン・ポスト』5月23日付によれば、「政変」の後ポジガイは西側記者団に「ハンガリーの現況はプラハの春に匹敵する」と語ったとのことである。確かに「プラハの春」の時のように経済改革が政治改革に連動する徴候が見られる。

今年の夏、4度目のブダペスト訪問の予定だ。カティさん達ブダペストの友人はどんな顔で迎えてくれるであろうか。

(1988年5月23日、カーダール退陣の報を聞きながら脱稿)

(金沢大学経済学部助教授)

(本稿は、国際関係情報誌 World Confidential Report、1988年6月号に掲載したものに一部手を加えたものである。)

『ことによるとメンデルスゾーンは、難解な音楽を書かなかったのかもしれない』というヴィトゲンシュタインの言葉は、たしかに当たっている。でも問題が、私は何なのだろうということなら、これでもいいが、私の代りに社会とは何なのだろうという場合には、これでは済まないのかも知れない。

(金沢大学経済学部助教授)